

六月の手拭い

宮里 尚安

珊瑚^{さんご}の香り 宮古島

その東^{ひんがし}に 位^{くちい}して

緑の平野 ただ中に

幸と平和を 求めゆく

希望も高し ○○町^{ちやう}

二〇〇五年（平成一七年）に、五市町村が
大型合併して「宮古島市」が誕生した。それ
以前に島の東南部に位置して町制を敷いてい
た○○町の町歌の一番の歌詞である。
町の式典や夏祭りで歌われ踊りの振り付け
も成されて老人クラブが舞台で踊った。合併
後も引き継がれて町歌として歌われ踊りもさ
れている。
詞の中の「緑の平野 ただ中に」が町民に
は好まれているようだ。“緑”はサトウキビ
の「青葉」だ。青葉が風に吹かれて揺らぐ様

が海原の波のごとくに広がる近景・遠景の純農村の風景である。〇〇町には四つもの学区があつて島では割と広い畑作面積であつたから、町民には日常で見慣れた風景に親しみがあつたのだろう。

さて、市町村合併の話は未だ持ち上がらない頃の〇〇町の一つの部落で起きた事件である。

突然に、一人の青年が、開拓移民で海外へ行って五〇町歩の農場主になつて篤農家になりたい、と宣言したもんだから、部落を二分するまでの大騒動となつた。

――農家の長男が、先祖が汗水垂らして開墾し守つて来た畑を捨てて、島を出る？

――五〇町歩もの畑をくれる国があるのか？

――ポリビア？ 聞かん国だ

実際、部落の住人にとっては初めて聞くことばかりであつた。「移民？」。内地への季節工などの出稼ぎはあつた。大阪などへ働きに行き期限が来れば島へ戻つた。移民は、島

を出て行き、戻らない。それっきり、知らん
国で暮らし続けるのだという。
ボリビアという国が、地球上のどの辺りに
在り、どれくらい離れた異国の地であるか、
謎だらけの問題であつたから、部落の大人の
男や女たちにとっては正に“青天の霹^{へき}靨^{れき}”と
も思える大事件であつた。
その日から、青年の野望を支持する男たち
と、男たちを浅知恵だと批判する女たちとの
間で一年にも及ぶ対立論争が展開されること
となつた。

長老たちは酒の座を増やして元気づいた。
戦時中に満州開拓義勇軍に加わっていたとの
体験談を語つて来た男は勢いをつけた。

――ケンの志は見事じゃ、大いに賛同。移民
を受け入れる国は大陸にあるじやろうから思
いっきり畑地に鋤を振り下ろせる。わしもな、
なかなか沈まぬ夕陽が地平線にあるのを眺め
ながら畑地を耕やす日々じゃつた。戦争に負
けて畑地も投げ捨てて島へ戻されて口惜しか

った。今でも夢に見るんじゃない。

――若かったら一等先に加わってるな。この島じゃ、二町歩も持てば篤農家入りじゃ。五〇町歩も持てるんだと？ ケンが言う通り“希望の大地”じゃろうな。

――そうじゃ。台風や旱魃のたんびに被害に脅えての島の農業におサラバ出来るもんな、ケンの勇気に拍手じゃ。

男たちはケンを酒座に引き入れては移民をせがんだ。

女たちは違った。女たちの語り場は公民館横の広場が涼み場になっていて、男たちを口撃した。広場に大枝を張って広がるガズマギ―（ガジュマル）は陽光をすっぽりと遮断して涼風を呼び込んでいたので、飲料や食料が無くとも話は燃えた。

――男どもは、酒を味付けにして何とでも言ってるらしいが、浅知恵さ。どこの国が、五〇町歩もの畑を条件も無しにくれるもんか。きっと、裏があるはずさ。

――そうよな。ボリビアという国は、ジャングルだらけらしいド。毒蛇もウヨウヨ這ってるらしい。ハブもいないこの島から行くんだから、余計に怖くなるさあね。

――まだまだ発展途上国というから、外国からの移民を使ってジャングルを伐り開かしたはず。

――移民して行ってから、難儀が多いから日本に帰りたいたいと言っても帰れんと思うよ。国と国が約束しての移民だから、簡単ではないはずよな。

女たちの先頭になって男たちを批判するリーダーは、部落の神事を執り仕切る役職に在るので司婆（ツカサンマ）と呼ばれている。“ンマ”とは高齢の女への呼称で、彼女の本名は“ツル”なので「ツルンマ」
とも呼ばれるが、神職にあるからと「ツカサンマ」と呼ばれている。

ツサンマは、女たちの言い分をまとめた。
いよいよ、ケンと父親のカマ爺しゅうに移民の大変

さを言い聞かせて、移民を思い止まらせるべきだとの決断をして、ケンの家へと乗り込んだ。二人はンナグザ海での魚突きを終えて帰った時刻であつたので、家に居た。二人とも農民だが、素潜りで魚をモリで突き刺す漁師とも知られていた。ツカサンマの隣人でもある。ツカサンマの表情を読み取った二人は隣人で、愛想を消して、室内の空気を締め、対座した。ツカサンマも隣人の表情を消し、用件に入つた。一部落から初めて島を出て行く“移民”だからと男たち女たちがいろいろ言ってるのは聞こえてると思うが、正直に言うけどな、ケンもカマ爺も今一度考え直したらどうかねえ。ツカサンマだからと言う訳ではないド。沖縄本島からもボリビアやブラジルへ移民がある。と聞くし、宮古島とは移民する事情はずいぶん違うそうじゃな。アメリカが絡んでる。

ツカサンマは小さく息継ぎをしながら言う。
「宜野湾とかはひどいらしい。アメリカ軍隊
が飛行場基地を造るからと、住んでる家をブ
ルドーザーで壊し、田んぼ畑もブルドーザー
で潰して、住民を追い払ったと言うド」
「一晩も掛からずに、家も田畑も潰された住
民はあわれじやな」
移民地での難儀苦勞の情報を得ていた。
「沖縄からは南方へも南米へも移民してる。
ハワイではキビ畑に放り込まれて一日中も働
かされて難儀の歌まで作って歌ったそうじゃ。
ブラジルのコーヒー園では奴隷みたいにこき
使われて夜逃げで隣りの国へ行ったらしい。
ボリビアはジャングルだらけらしいド。どん
な難儀苦勞が待っているか、今なら考え直し
も出来るはず、二人とも深く考えたらどうじ
やろうな」
ツカサンマは言い切った顔で二人を見据え
た。喉が乾いたが茶も出されてないので二人
に見えるように深く息を吸った。

カマ爺しゅうがようやく口を開いた。上半身が裸
なので胸の張りも両腕の筋力もまだ若々しい。
カマ爺は吸っていたキセルの火をポンと捨て
てると言った。
「隣りづき合いで暮らして来たからンマの気
持ちは分かる。女たちも心配してる事もない。
だが、考え直すことはせん。ケンが夢を抱い
て行きたいと言う。子の夢を叶えさせてやる
のが親の務めじゃ。わしも母親も行つた所が
死に場所と覚悟は決めとる。みんなには心配
させんように言ってくれ」
ケンがカマ爺に小さく頭を下げてから言つ
た。ランニングシャツから出た腕に若さがた
ぎつて見える。
「ツカサンマが聞いた移民情報はぼくも集め
てあります。戦争が敗けて外地からの引き上
げ者の急増で食糧が不足し、米軍が土地を接
収したために住む場所を追われたこととが重
なつて、琉球政府も仕方なく移民政策を打ち
出した。『南米ボリビア農業移民募集』をも

読みました」

「ツカサンマが言った通り、他島からの移民とこの島からの移民とは事情は違うけれど、ぼくにとってはボリビアは『希望の大地』なんです。自分で決めたことです。このチャンスを絶対に逃したくないんです」

「親や妹たちに苦勞させることに胸は痛みますが、一緒にボリビアの大地を耕したいと応援してくれるカマ爺にはとても感謝しています」

ケン は力強い口調で言ってからカマ爺にまた小さく頭を下げた。

そして、言った。

「生ま里を忘れたりには絶対にしません。難儀苦勞な暮らしをしようとも、生ま里への想いを心の奥深くに秘めて生き続けて行く覚悟は決めています。生ま里へは感謝です」

涙声になった。

しばらくは対話が絶えた。三名の沈黙は吹き流されて行く室内の風に和まされた。

ツカサンマが姿勢を正した。
「二人がそこまで決めてるんなら外からはも
う言えんな。それなら、ツカサンマとして言
うことがある」
「島を出て行っても里の神はあんだたちと縁
切りはせん。ツカサンマとして、あんだたち
一家の家内安全をウイピヤームトウ（拝所）
の神に祈り続ける。広い畑地を耕せる身体を
守って暮らせるようにと」
「そしてな、一日の働き疲れがあれば、庭に
出てクイチャーを歌い踊れ。生まり里の神社
の庭で部落のみんなと歌い踊ったのを思い浮
かべて、ボリビアの土を地鳴^ならするまで二つ
の足で蹴り上げて、腕を振り上げて歌い踊れ
ば、きっと難儀苦労は消えるはず。ケンもカ
マ爺も、忘れんでよ」
二人は素直に頷いた。
ツカサンマは勢いを付けて立ち上がり退去
すると、その足で女たちの涼み場へ行き、ケ
ンとカマ爺との和解を伝えた。リーダーのツ

カサンマが当事者二人と和解したことに女たちは同意した。
一年近くも燃え盛って対立論争していた騒動も下火となり、部落は元の静けさに戻った。
そして――。

二ヶ月後には、青年・砂川健一（通称・ケン）は一家を率いて、地球の裏側の南アメリカ大陸に在るというボリビア国へ“希望の大地”を夢見て、漲水はりみずの港から勇躍船出して行った。

五〇年の歳月が流れた。
ケン一家の消息は部落に届かない。
あれほど声高に、生まれ里を絶対に忘れない、とツカサンマに誓ったはずなのに、ボリビアでの移民暮らしを伝える一枚のハガキも一通の手紙も、部落の誰かにも来ない。
やはり、移民地での難儀苦労に疲れ果てて生まれ里へであつても便りを出す元気も湧かんだらう、移民論争に燃えていた男も女たち

もケン一家のことを忘れ、年老いて、あの世へと旅立った数も増えた。ケンに続いて“希望の大地”を夢見る青年も現れなかった。五〇年という歳月の流れの中で、“移民”は昔の物語となったのだろう。

さて、これだけの話だと、一幕物の短かい話で終わってしまうだけだが、世の流れには“謎”が付きまとう。五〇年も過ぎてから、ある朝、突然に、一人の女がボリビアから訪ねて来た。移民絡みの事件が勃発した。

五〇年前の“移民騒動”は部落を二分しての対立論争にまで発展したが、今度は部落の一人の女だけとの対面劇となったので動と静の全く対照的な第二幕の展開になった。

二

ミツ子は、部落の神事「ナーパイ」を執り仕切る二代目のツカサンマである。一人暮らしの朝食を終えて座椅子でまどろんでいた。

携帯が鳴る。台所に置かれているようだ。
耳に故障はないが、年寄りにはボリュウム大
が いい から と 設定 されて いる の で 一 人 住 ま い
の 家 の 静 け さ の 中 で 存 分 に 鳴 り 響 く 。
携 帯 を 開 け る と 「 照 子 」 と あ る 。 神 社 近 く
の 女 で 年 は ず つ と 下 だ が 気 が 合 う 。 長 電 話 に
な り そ う だ 。
「 朝 の 時 間 に 電 話 来 た こ と は 無 い が 、 急 用 ね
え ？ 」
「 ミ ツ 子 姉 さ ん 、 近 ご ろ 身 体 が 重 く な っ て な
い ？ 電 話 取 る の が 遅 く な っ て る 」
「 カ サ マ ス ！ へ う る さ い ！ 」 用 事 を 言 え
「 ウ チ は 、 朝 起 き た ら 庭 の 花 木 に か ら 水 撒 く
さ ね 。 今 日 も そ う し て た ら 車 が 走 っ て 来 る 音
が し て 神 社 の 前 で 止 ま っ た 、 タ ク シ ー が 。 不
思 議 さ ね 、 こ ん な ボ ロ 神 社 を 見 に 来 る 人 は 居
な い の に 、 し か も 、 タ ク シ ー で 来 る か ら さ
「 や は り 、 長 電 話 の 調 子 だ 。
「 す る と 、 運 転 手 が 降 り た 、 オ ジ イ の 年 で 、
そ れ が さ 、 ウ チ と 目 が 合 っ て し ま っ た わ け 。

そしたら、そのオジイ運転手がウチにオイデ
オイデするわけ。何で初対面なのに横着者と
無視していたら、自分から歩き寄って来た」
家の背に在る森でセミが鳴き出した。
「運転手はニコニコ顔で、ボリビアから来た
というお客さんが“うるか神社”を見たいと
言うから案内して来たけど、この神社のどこ
を見るのかな。田舎では一つしか無いヤマト
ウ形式の神社とは聞いているけどね、神社の
隣りに住んでいる方なら案内出来ると思って」
「ボリビアからのお客さん？」
思わず声を高めて聞き返した。
「あれッ？ ミツ子姉さんの知ってる人？」
「男の人なの？」
「いや、女。七〇は近いと思うけど、外国か
らの観光客とは違って、着飾ってない。それ
に、畑仕事で焼かれたらしく肌も黒く、両腕
とも太い」
「ボリビアに住んでる人は一人しか知らん、
男だからね。女は全く知らん」

「そしたらさ、その女の人は料金を払ってタクシーを帰した。ウチと二人つきりになってしまつてさ、チムドン（心臓どきどき）になつてさ、でも、女の人は日本語はしゃべれるけど」

「そんなら、照子で対面していいから、後で話を聞かしてくれればいい」

「切らんで。ミツ子姉さんも絡んでるらしいから。あのね、その女の人は、ボリビア移民したケンという人の奥さんだと言うのよ」

「エエッ！ 今度はミツ子の心臓が震えた。」

「ケンという人を知ってるの？ ミツ子姉さん」

「隣りに住んでいた健一兄さん、小さい頃からケン兄あきと呼んで遊んだから」

「そんなら、ミツ子姉さんが相手したほうが分かり合えるさ。それにね、変な事も言ったよ。自分はケンの昔の許婚いいな者づけだった女の人の会いに来た、と」

「ミツ子は仰天した。」

「ケン兄がボリビア移民した時、生まれ里に残して行った」「いいなずけ」は一人しか居なかったはず、ウチ一人しか」

「ミツ子姉さん、何驚いてる？ 許婚者だった女^{ひと}を知ってるの？ 誰？」

「奥さんだという女^{ひと}は、許婚者だった女^{ひと}の名をケン兄から聞いて来たと言ってる？」

「はつきりとは聞いてないみたいよ。ツカサシマに聞いたら分かると言われたみたい。あれッ？ ケンという人が移民したのは五〇年前なら、ツカサシマはミツ子姉さんではないね」

「おっ母のツルンマだった。死んでしまったいるからもう聞けない。厄介になつたな」

ミツ子はホッとした。

ケン兄が奥さんに許婚者だった女の名を伝えなかつたのはミツ子への配慮であつたのか。もしかしたら、ミツ子の名を忘れてしまったのではなか。そうだったら、五〇年間もケン兄からの便りを待ち続けていた自分の人生

は何であつたか。どんな事情か知らないが、
ケン兄^{あさ}本人が里帰りして、ちゃんと説明する
べきじゃない？
それとも、ケン兄はもう生きてはいない？
死んでしまった？ 怖い！
ミツ子は怒りの感情と死への恐怖が入り混
じって頭が混乱した。
「もしもし、ミツ子姉さん、今日は変だよ、
大丈夫？ あのね、ウチは今から孫の保育園
のおゆうぎ会を観に行くからボリビアの人と
相手している時間はないからさ、早く来て相
手してよ、じゃねー」

電話は切れた。ミツ子は携帯を台に置き呆
けたままで立ち竦んだ。何という日だ、どう
したらいい？ 大変になったさあ！！

ミツ子は座椅子に座り直し思索した。
（時間稼ぎして神社には遅れて行こうか。そ
の女が居なくなっておれば幸いだ、照子には
軽く詫びればいい）
（本気か？ 外国から夫の生まり里を訪ね来

た女^{ひと}を対面もせずに帰していいのか？

三〇分ばかり思案した。溜息をついてから
仏壇に手を合わせた。

――母^{あんな}、やっぱし、ケンの奥さんという女^{ひと}と
話して来ようね。

ケン兄^{あざ}の「いいなずけ」であつたことは隠
して話す。「いいなずけ」のことを知ってい
たのは母とウチだけだつたから、今はウチだ
けさね、誰にも知られんと思うから。

ミツ子は着換えも考えた。遠い国から一人
でわざわざ訪ね来ている人にはちゃんとすべ
きか。写真を撮ろうと言つたら断わろう。普
段着にしよう。

軽トラを走らせて行き、神社の庭の東隅に
停めた。軽トラは野菜畑に通う必需品だ。

女の姿は見えない。

へ帰つたのかな。早く来て話すべきであつた
かな。ケン兄に悪いことしてしまったね。

上に居るかもと鳥居をくぐり石段を登ると
人影が動いた。向かい合つて据えられた石像

を手拭いで拭いている女の背姿だ。
気配で振り向いた女は気軽るに小さく頭を
下げた。初対面の緊張は無い。照子からミツ
子が来ることを告げられていたからだろう。
ミツ子も小さく頭を下げた。
女は手拭いを離さずに言った。
「ケンハ、子ども時代の遊び場は神社だった
からシーサーに乗り勝負をした、と言ってた
ので、シーサー二匹の頭、胴体、脚を拭きま
した。シーサーのカザ（香り）がどれだけ拭
き取れるかは分かりませんが、持ち帰ってケ
ンに嗅いで貰おうかなと思つて」
女はいたずらっぽい目で言つた。
ミツ子は戸惑いながらも、女との対決に気
分が緩むのを感じた。奇妙な事をする女だ。
「ケンはシーサーと言つていたが、獅子舞い
のシーサーと同じですか？」
女は二匹を見ながら言う。ミツ子は笑い顔
で、「神社の門番は狛犬こまいぬと呼ぶそうですから
獅子舞いのシーサーとは違いますね。でも、

二つともこの島には居ない動物なので困って、子どもたちは”イヌ“と呼んだり”シーサー“と呼んだりしているようですよー

「じゃ、わたしはケンに味方して“シーサーと呼ぶことにします”

ハイ、ミツ子も笑い顔で同意した。

女はシーサーを拭いていた手拭いをバッグに入れ、別の手拭いを取り出した。

「自己紹介は後にして、境内の木の香りと吹き流れる風を集めましょうねー」と言い、大枝を張っている樹を仰ぎ見て、何という樹？

とミツ子に問うた。女の奇妙な行動に戸惑いながらも、女のパフォーマンスに加勢して境内案内のガイド役をしてもいいなと思った。

近づいて行き、
“ユスクギー”と言った。

「樹液が甘いんでしょね、ルリ色の羽根と身体をした中型のセミが好んで止まって鳴くんです。でも、この樹はすっかり年取って樹液が吸えないのかセミの姿も鳴き声も聞かしてはくれませんねー

ユスクギー、ですね、女はメモ書きした。
「根本から三本の太い幹で分かれて伸びてま
すね。香炉が置かれていますよ」
「神木と崇めて祭りの日に香焚きをするんで
す」
「じゃ、神木のカザ（香）を含ませます」と
言って、女は幹三本を手拭いで拭いた。
（一丁上がり）ミツ子は呟いた。
二番目の角の樹を「プククギー」と言う
女はメモ書きしてから、
「この木は知ってます。読谷村地域ではフク
ギと言います。屋敷木として植えられていて
大風を防がせていました。香炉があります、
神木ですね。ハイ、これも三本に分かれてい
る幹を拭きましようね、ケンさん」
（二丁上がり）ミツ子も明かくなかった。
三つ目の角の木も神木にされている「ジュ
フクギー」。「沖縄県の花、デイゴですね」
「高い枝に真っ赤に咲くので近所から見え
るそうです。咲き過ぎると台風になると

警戒されたりするんですよね」

女はジュフクギーの幹をも拭いた。

（三丁上がりッ）

ミツ子は小声に出して言い女に頷いた。

本堂裏の小さな祠の前を通り四つ目の角を

回った。樹木はあるが神木として香炉は据え

られてないので女は手拭いを広げ風を受けた

だけで元の場へ戻った。

「ケンには境内を走り回ったと言っていたが、

神木は分からなかったはずなので三本の名を

教えます」

女は二本の手拭いを大事そうにバッグに入

れて、境内を見渡してから石段へ向かった。

ミツ子は不思議に思ってた。

「写真は撮らないんですか？」

（ケン兄は写真を見たいはずだ）

女は石段の上で振り返って言った。

「ケンには、写真は見れないんです。人の身体

はぼんやり見えるけど、新聞の字も写真も見

えなくなってるんです」

エエーッ、ミツ子は凍りついた。
（ケン兄の目が見えなくなっている？ 信じられん。だって、毎日のようにンナグザ海のヨンシー岩^い辺りを潜って、魚を見分けして追いかけて銛で突いていた部落の誰よりも頑丈な目だったんだよ。何でだよ、ケン兄！）
女は黙したままで石段を下り鳥居をくぐつて庭を歩いて行き隅に置かれてある玉石^{たま いし}に腰を下ろした。境内での明かるかった対話を封じ込めた身体に見える。
（それでケン兄は、自分が来れないから、奥さんを代わりに来させたんだね。どんなにか里帰りして自分の目で見たかったはずなのにね）
（でも、ウチには、どんな話をしたかったのかな）
頭の内が混乱するのでミツ子は大股で石段を下り鳥居をくぐり庭をも大股で行き、別の玉石に坐って女と同じように広がっている庭を向いて眺めた。六月の陽光が暑さを増して

きた。女は黙したままだが沈んだ目ではない。
やがて女はミツ子に向いて言った。

「このミナカでケンみんなと歌ったり踊つたりしたんですよね」

「ミナカ、も知ってたんですか。そうです、

神社のミナカ（庭）が祭り場ですから、十五ジュウゴ

夜ヤ舞台ユ、豊年祭をやりました。ケン兄は青年

団のリーダーでしたからどれをもやってまし

たです」

「そうだったと聞いてます。すみませんが、

祭りのことを聞かして下さい」

「エッ？ 急にですか？」

ミツ子は女を見た。女は真顔で頷く。

ミツ子は直ぐに意を決した。

（二度とは来れない人の頼みだ。今度はウチ

が明るくパフォーマンスで語ろうか）

真っ先に浮かんだ十五夜祭にしよう。

――真っ昼間ですが、東の空はあそこですか

ら、あの辺りに月は出ると思つて下さい。

――鳥居に向かつて右半分の庭に「十五ジュウゴ夜ヤ舞ユ

台^{カニ}」を作りました。青年団がどこからかドラム缶を運んで来て立てて並ばし、板を乗せて、カップを敷いて舞台にしました。壁を作り、天井は無く、電線を引いて裸電球を五個ばかり吊るしました。それだけでも劇場の舞台のようになぶしかったです。

――当日は昼から発電機を起こし、ドツドツと地面まで揺らしました。司会をする男の青年が「ホンジツハセイテンナリ」と叫び続けるので、みんなは急ぎ集まりました。――プログラムは配られないから司会が報せるだけ待ちました。琉舞では、浜^チ千鳥^{ジュヤ}、加^カ那^ナヨ、上^スリ口^{ブイ}説^{ドク}、日舞では、旅笠道中などがありました。どれにも拍手喝采でした。

「ケンハ、どれだけ出たんですか？」

女が待ち兼ねた声で聞いた。
ハイ。お待ち遠さまでした。ケン兄は、トリでの出番でしたので、声も良く、声量もあったから、流行歌を歌いました。伴奏無しです。毎年違う歌でしたが、ウチが一番好きだ

ったのは「あこがれのハワイ航路」でした。
ケン兄が船員帽を被り、白い服のマドロスで
舞台に出ると拍手でした。

――ケン兄が、晴れた空、そよぐ風、と歌い
出すとみんな手拍子を打ちました。中には歌
い合わす人もいました。処女姉さん（女子青
年）たちにはウンとモテてました。

――ケン兄は、あの頃から外国へ行きたいと
あこがれていたと思います。

女は聞き入っている。

――西半分では豊年祭で青年たちの「スマ」
大会がありました。相撲のことを「スマ」と
言います。テレビで観る「見合って、ハツケ
ヨイ」とは違って、最初から抱き合って取る
んです。相手を倒して完全にお尻を着かさな
いと勝ちにはならないから、審判は何度も取
り直しをさせたので、見ている人たちは疲れ
ました。

――他部落から来た横綱体格の男が優勝商品
の米俵を担いで帰るのを見て、ケン兄たちが

くやしがつっていたのが面白かったです。

アハハハ。女が笑った。声出しは歓迎だ。

ミツ子はガイドを続けた。

――玉石^{たま いす}の近くが「クイチャーの踊り場」でした。豊年祭ではみんなで円陣になって歌い踊りましたが、青年処女たちは月の出る晩には案内が無くてもここへ集まって来て踊ったんです。少ない人数でも歌い踊ると部落の遠くまで聞こえました。ラジオもテレビも無かったから、青年たちの足で地面を蹴る音が響いたんですね。

――クイチャーを歌い踊った青年と処女たちの中には浜辺に消えたのもいたそうです。その人たちは結婚したと聞きました。

「ケンも楽しんだでしょうね」

――ケン兄にはせがむ処女たちが多かったそうですから、選ぶのに苦労したと思います。

「贅沢な悩みをしたんだね」

妬く色は無く、むしろ楽しんでいる。

「そんなにしてクイチャーを守り継いで来た

ので、宮古島を代表して、大阪万国博覧会にも出場出来たんですね」

――万博出場をも知ってたんですか？

「万博は世界的な規模のイベントですから、コロニア・オキナワからもツアーで行きました。その人たちから聞いたんです。ケンも喜んで聞きました」

――でもね、行く前には「事件」があつたんですよ。

事件？　女は興味ありで耳を向ける。

――クイチャー出場は恥さらしだから中止せよ、と新聞に書いた人が出たんです。

「恥さらし？」

――地面を蹴ってヤグイ（叫び）して踊るのが台湾の蛮人の踊りに似ているから、と。

「台湾蛮人はどんな人か、踊りも知らないけど、書いた人は内地の人？」

――いいえ、島の人です。ショックでした。でも、愛好会の会長さんが、そんなことはない、立派な民俗芸能だと新聞に書いたので事

件は終わりました。愛好会員二十五名で一九七〇年、昭和四十五年の八月、万博会場での「民俗芸能の部・沖縄県の日」に宮古郡代表として踊りました。ウチも夫婦で行きました。忘れられない“ヤマトウ”の旅でした。

「そうですか、そんなことがあったんですか。初めて聞きました。今ではすっかり代表の踊りになってますから、良かったですね」

安堵した表情になってからミツ子を見た。

「あと一つだけ聞かして下さい。クイチャーの歌の中に、ニノヨイサッサイ、と何度も歌われますが、どんな意味ですか？」

「意味ですか？　ハヤシなので意味は分からないで勢いをつけて歌うんですけれど。

「響きがいいんですよ。クイチャーは人頭税の頃から歌い踊られていたというから、人頭税廃止を叫んだ“アララガマ精神”でしょうかね」

「学者みたいです。でも、ニノヨイサッサイは、クイチャーにだけ歌われているんじゃない」

やないですよ。民謡でも歌われています。ウチの母は糸車を回しながら島の民謡をずっと歌い続けていたので、子どもの頃から聞いていました。

――ゆっくりした民謡「池^{イキ}間^マの主^{シュ}」では間奏みたい「ニノヨイサツサイ」を呟くように静かに歌うんです。クイチャーの叫びとは違います。ものがなく、神に祈るような声音で、平和な世の訪れを乞うような。

――「根^ニ間^マの主^{シュ}」は軽やかなテンポですが、長いハヤシの尾にくっついて歌われます。ですが、これも心に残ります。国吉源次という民謡歌手が歌うと特別に聞こえます。切ないような、胸の内が温められます。

女はウンウンと頷いている。
ミツ子は歌をせがまれるかと警戒したがその様子は無い。
「いい話を聞きました。ケンと歌い合わせてみます。胸の内を温めます」

女は庭を見渡し、鳥居の上の境内を見た。

「わたしが育った地域では神社は見かけませんでした。がこの島では田舎にもあったんですか？」

「昔はここはムトウ（うがんじゅ）だったけど、戦勝祈願として鳥居を建て社殿をも部落の有志で建てたそうです。」

「シーサーも座らして石垣も積んでね、大掛かりの工事だったでしょうね。」

「興味ありましたら『うるかあざ字誌し』を自治会長に送らしましょうか？ 建てた人たちの名前も工事費用もこまかく書かれていますから。」

歴代町長名も部落会長名もですね。ケン兄に読み聞かせたら懐しがると思います。

「部落の役員たちが十何年も掛かって作った字誌なので六百ページもあって、行事の写真、神願いの写真、クイチャー、パイアークも写真もいっぱい載せられていて重さが五斤きんもあります。役員が実際に計ってみたそうなので本当です。」

「そんなに重かったら、ポリビアまでの送り

賃はビックリですよ」

——アガイ、シュワースーナ。ジチカイヤ
ジンナ　ダウ。

女はアハハと笑った。方言は通じたようだ。
女はゆっくりと言った。

「心配しなくていい、自治会にはお金は沢山
有るから、ですね」

——「ダウ」までもわかるんですか？

「ケンとカマ爺が二人で話す時はずっと方言
でしたから、ミヤークフツは聞き慣れました
。ケンとは四十年も暮らして来たので」

——四十年も一緒に暮らしたんですか。

言葉が尖るのを自分でも気づいた。夫婦な
んだから当然の事と思いながらも、ケン兄と
の暮らしの長さが胸に応えた。

ミツ子が表情を急転させたのを見て、女は
口調を変えた。

「自己紹介します。サヨです。読谷村の中学
を卒業した年に家族でボリビア移民しました。
ケンとは、コロニア・オキナワで出会って結

婚しました」

ミツ子は気分を平静に戻した。

「わたしが読谷に是非もの用が出来て里帰りしたので、ケンの生まり里をも見たいと言つたら、とんでもないことをケンに頼まれたんです。花嫁移民で呼び寄せると約束をした許い婚者の女を残して来たので、会って届けてくれと渡されたんです、これです」

サヨは封筒を見せた。黄ばんでいる。

「十五年も前に準備して、何としてでも里帰りしてその女に詫びをしたかったが出来ないままに、ずっと引き出しの中に入れたままだつたらしいんです」

「十五年前には目はしっかりしてたので、字をも書いていたから、その人への詫び状と移民暮らしの難儀苦勞をぎっしり書き込んであると思います。ケンは、ツカサンマが知ってるから聞きなさい、と詳しいことは言いませんでした」

サヨは深く溜息をついた。

「照子さんから、ツカサンマは亡くなったと聞いて、ケンの頼みは叶えられなくなったとケンがかわいそうで、ぐずぐず時間を潰してしまいました。あなたにもガイドをお願いしたりして、すみませんでした」

ミツ子は思い切って言った。

——その女ひとのことならツカサンマから聞いてました。

サヨは目を見張った。

「聞いてたんですか？ 名前をも？」

——ハイ。ウチの、姉です。

「じゃ、会えますか？ 急ですが」

——会えません。死んじやったんです。

すらすらと口に出せた。自分を姉に仕立てる策略を用意してあった。

サヨの身体は萎えた。呆けた目になった。封筒を膝の上で両手で覆った。

ミツ子はサヨを励ますように声を高めた。

——嫁いでいたので、家族には言えません。ですから、ウチが受け取ります。

サヨは戸惑いの色を見せたが、
「そうするより仕方がないですね。ケンには
神社の神様にお供えしたと言いましょね」
サヨから受け取った封筒をうやうやしく目
の高さに上げてから、ミツ子は言った。
――五〇年も待っていたケン兄からのラブレ
ターを読めずに姉は残念がっているでしょう
ね。それを封もあけずに神社の神様にお供え
したと言ったら、もつと寂しがるはずです。
どうですか、二人で読みませんか？
サヨは意表をつかれた顔でミツ子を見た。
ミツ子はいたずらっぽい目を作った。
サヨがクスツと笑った。
「妹さんの提案なら、お姉さんも赦すはず。
でも、わたしが読むのは赦すかしら？ お姉
さんにとっては、わたしは“敵”だはずだか
ら」
敵ですか？ ミツ子が笑い声で言ったので
サヨも笑い出した。
ミツ子は親指と人差指で○を作って

——姉もOKと言ってますので開けます。

ミツ子が指で封切りするのをサヨは見入る。

ミツ子は楽しくなって来た。五〇年も過ぎてからのケン兄の思いを“敵”だと言う奥さんと読むのだから普通では考えられないが、四時間半の訪問客との対面劇と思えば心は軽く済む。

封切りをして開け口を膨らませて指を入れる。固い紙の感触。引き出すと、写真が二枚。便箋があるはず、膨らませたが見えない、逆さまにしたが紙は落ちない。

そんなはずはない。二人は見合った。

サヨが奪い取って確めるが便箋は入っていない。サヨは尚も探り見てから首を振る。自分の予測が大きく外れてのショックだろう。

やっと気を取り直して二枚の写真を見る。

一枚は作物農場で青葉が広がっている風景。

二枚目も同じ場所の作物農場のようで金色に広がっている風景。眼前の風景をパチリと映したと思える気軽な写真だ。

裏面に記述があるはず、裏返す。一字も無い真つ白。場所、月日、説明、コメントも一切無し。二人はまたも見合った。裏切られたような怒りの感情と空しさが混ざる。ミツ子が手放した写真をサヨは尚も見据えている。許婚者であつた女への一言の詫びも無い薄情さを夫に感じているのだろうか。それよりもミツ子は深く傷ついた。謎めいた写真二枚だけで五〇年もの償いを読み取れと言うのだろうか。六月の陽光を遮る物も無い庭（広場）に居る二人の女の肌は、無言のまま焼かれる。分かりました、サヨの叫びにミツ子は我に返った。サヨは二枚の写真を並べた。―こっちの青いのは、大豆の青葉成長期の農場で、黄色は収穫前の重い実を垂らした大豆農場です。ケンには青いのを『朝日の海』、金色のを『夕日の海』と呼んでいました―ケンには、二つの風景を、沖縄の海に例えて

子どもたちに誇らしげに言い聞かせます。ン
ナグザ海の朝方の波、夕方の波が広がる海原
だと言うのです。ボリビアには海が無いから
自分が植え育てた大豆が海の景色に見えるの
がとても嬉しいのでしょうね」

――エーッ！　ボリビアに海は無いですか？

「内陸の国ですから」

――海が見たいときはどうするんですか？

「隣りの国をまたいでまで車を走らせて見に
行く時間もお金ありませんから」

――五〇年もの間に一度も海を見てない？

「誰もがそう過ごして来たから、別に」

ミツ子はサヨを見つめたまま絶句した。

（あり得ない。毎日海に潜って魚突きをして
いたケン兄が、移民してから五〇年に一度も
海を見ていない、潮水に身体を入れていない、
そんな生活に耐えられたのだろうか？）

（二枚の写真は、奥さんが言ったとおりだろ
うか。ウチには分らん。せめて、短かく説
明書きを添えてもいいんじゃない？）

「ミツ子さんには分かりづらいと思いますが、
ケンを問い質すのは今更かわいそうなので、
お姉さんに祈る時はそう言って下さい」
ミツ子は頷いた。そうするより仕方がない。
「海は無いけど、大きな河はあるんです。と
ころが、洪水を起こしてオキナワ移住地を襲
って畑作物を全滅させたので、移住地を変え
て、河は魔物だと恐怖心ばかりを抱かせたん
です」
「ですから、ケンは余計に、生まれ里で親し
んだ青い海、金色に染まった海を思い浮かべ
るんだろうと思うんです」
ミツ子の心はほぐれて来た。
「そして、ケンが伝えたいのが、農場の広さ
です。この写真は第二農場です。第一、第三
農場を合わせると三〇町歩があります。ケン
が許婚者に言ったという『希望の大地での篤
農家』になれたと写真で見せたかっと思う
んです」
「それと、あと一つのメッセージです」

サヨは言った。

「農作業は機械化されていてケンにはトラクターを運転して農地を耕し種蒔きをして農場を広げました。トラクターを運転している写真もあります。でも、顔が写ってるのは入れず大豆畑の風景だけです」

「年老いての写真は見せない、若い時のままが良い。そして、移民暮らしの難儀苦勞を書かず、家族を語らずの、生ま里に残した女^{ひと}への五〇年後のラブレターだと思われませんか？」

ミツ子はサヨの推論をすっかり信じた。

――サヨさん、お供えしましょう。

サヨを促して鳥居をくぐり石段を上り社の裏へ回った。小さな祀の内に封筒を置いた。

ミツは晴れた声で祈りを唱えた。

ヘタウトウガナス 部落ぬ神^{カム}

神社ぬ神^{カム}、アウガマ・クイガマ

遠い国から来られた方からの大きな喜び
申し上げますのでお聞き届け下さい。

神社境内を走り回りシーサーに乗って遊
んでいたケン坊が、ボリビア移民をして
ジャングルを伐り開き難儀苦勞を重ねた
末に、三〇町歩の大豆農場を持つ篤農家
になったという報告です。
この大成功をツカサンマが第一番目に聞
いたので、神さまに報告し、十一月の敬
老会でも封筒に入っている二枚の写真を
オジイ、オバアたちに見せ報告します。
これからケン坊一家をお守り下さい〜

三

許婚者^{いいなずけ}だった自分を姉であつたと偽つての
サヨとの対面に少しの呵責はあつたが、時間
が立つうちに本物らしくなつて来て、ミツ子
はサヨにケンと許婚者との思い出の場所を見
せて、ケンに伝えさせることが土産話になる
と思ひ、神社の庭に停めてあつた軽トラにサ
ヨを乗せてそれらの場所へと出発した。
その前に自宅に寄りお茶タイムにした。

ウイピア森の脇道に入り庭に車を停めると
下りたサヨが叫んだ。
「絶景だあ！ 海を真正面に見れての毎日な
んて、贅沢過ぎるーッ！」
――母^{あんな}が潮の満ち干きが見たいと引つ越して。
サヨを庭先の木の椅子に座らせナーパイの
資料を渡した。お茶の用意で家へ入った。絶
景を見渡してからサヨは資料を読んだ。A 4
紙に、ナーパイ伝説、と手書きがあり、古い
本からのコピーらしい詰め込まれた活字があ
る。学者の論文？ 緊張はあるが読んだ。

サーニ二八許りの頃、ンナグザ浜で嘆き悲
しんで居ると沖の小岩「ヨンシー岩^{じい}」辺り
から小舟一艘漕ぎ寄せ月光のように光り輝
く美人が来た。サーニ大いに驚き是れ必ず
天女に相違ないと砂の上に頭をつけて拝ん
だ所が、美人サーニに言ふよう、吾はウマ
ニヤーズといふ者で竜宮の命を受けて貴方
の妻になるために来た者であると言つて辞

するのにも聞き入れずウイピア森の荒屋を造り直して住み夫婦となつた。こうして月日を重ね二人の間には七男七女の子宝を儲けて繁昌したが、其の間サーニが不思議でならなかつたのは、別に家に蓄えがある様子もなく又田畑等勿論なかつたけれども三度の食膳には常に山海の珍味が取り揃えられ何処からは等の御馳走が準備されるのか分からなかつた事である。或る時妻が井戸に水汲みに行つた隙を窺いかねてから厳しく禁制になつてゐる事でした。だが此の食事の不思議を知りたくてサーニは鍋の蓋を開いて中を覗いて見た。しかし鍋の中は案外にも水だけしかなかつたので不思議に思いながらやがて妻が帰つたら魔法で食事が出来るものだろうと思案して其儘にして置いた。妻は帰つていよいよ食事をしようとする。と鍋の中はいつもと違つて何の準備もなく唯出た時のまま水だけであつたので、色を変えて驚き且つ怖れサーニ

を責めたけれどもサーニは唯だまって笑っている許りであるので、これは屹度自分の留守に秘密を侵したものである。斯うなる以上はもう仕方がないサーニによく話をして夫婦別居する事になり、サーニは北方に家を新造して其処に住まわせる事にした。やがてウマニヤーズは子供達に別離を告げてンナグザ浜から鰺といふ大魚に乗って竜宮に去ったが、この時子供達に津波の難を避けるために毎年三月初酉の日に磯浜に出てダデイフ（真竹の一種）を刺し付けて海陸の境を明らかにすれば津波の難を防ぐ事が出来ると教えたと言ひ伝えている。この津波除けの神事は「縄延ナニバい」と称し、現在に至る迄旧歴三月初酉の日には砂川の女たちは磯浜に出て「ダデイフ」を刺し、男たちは御嶽ウタキの庭で「船漕フナウぎ」を行なう。読み終えたサヨは背伸びをした。ポリビア

で何十年も断片的に「ナーパイ」を聞かされていたが、やっと全容を知らされたのだ。ケンとの話が深まる。訪ね来て良かった。粗末な木のテーブルに向かい合うとミツ子は“姉”がケン兄の消息を聞き巡った歳月を静かに語った。

――姉はケン兄と二人でヨンシー岩^いに泳いで渡った時に言われたそうです。花嫁移民で呼ぶから、一〇年待ってくれ、と。待っている。した。でも、田舎で娘が二十七まで待つのはとても辛そうでした。

――「世界のウチナインチュ大会」が五年に一回開かれていたので、那覇の国際通りでのポリビアのパレードを見に行っていました。結婚前に二回、結婚した後は、こっそりと。

――那覇の新聞社が南米の移民地に記者を派遣してインタビューした記事と写真集を発行しました。平良の図書館へ行ってポリビア編にケン兄が出てないかを探してみました。

――沖縄県はポリビアの日本人学校に教師を

派遣していたので、ウチの息子が浦添の中学に教員をしているので、派遣された先生たちの研修報告文をコピーして送ってもらって読んでいました。でも、ケン兄のことは分かりませんでした。

――ケン兄を責めてはいませんでした。元気で居るか、家庭を持って幸せに暮らしているか、それだけを知りたかったと思います。

サヨは聞き入り、涙目で頷く。

そして――。

サヨさんは一時半に神社の前で待っていた。タクシーで宮古空港へと急ぎ去った。

ミツ子は神社の祭神（姉妹神）であるアウガマ・クイガマに供えてあったケン兄からの写真二枚入りの封筒を持ち帰り、母あんなの仏壇にケン兄の妻とうまく話し終えたと報告し供えた。だが、気分は完全に晴れない。海を見て。ハッピーエンドのはずであったが。

庭先の木のテーブルでお茶を飲み、“姉”

のケン兄への思いを告げた後で、サヨを軽トラで大津波で消えた四つの部落跡の「元島」を見せ、ケン兄が魚突き場にしていたヨンシロ岩^いが見える海岸まで下りて見せて話した。元島よりも低い海岸ぺりに建物が建っているのをサヨは、津波が来たらどうなるのですかと案じた。東日本大震災で津波があつたし、南海トラフ地震が起きると日本は騒いでいるのにね、サヨは真顔で案じた。

――マンション、リゾート高級ホテル、ゴルフ場、もっと増えると思いますよ。ウチたちが何百年も祈り続けている「ナールパイ」は笑われてるかも知れんですが、命の限りは祈り続けます、とケン兄には伝えて下さい。

そうまで言つてサヨさんとの対面を完結させたはずだが、と思索していて、サヨが言つた「ポリビアには海が無い」を思い出した。ミツ子はアツと叫び、軽トラを噴かした。浜に下り、ヨンシロ岩を洗つて寄せるンナグザ海の海水をバケツに汲んだ。青色の手拭

いをバケツに入れた。生まり島の海の青さに
手拭いが染まってくれと願ひ、絞らずに庭先
の木の枝に吊るした。吹き上げて来る潮風に
手拭いが乾く間、ミツ子は幾月も忘れていた
顔の手入れをした。野良着に換えて六月に映
えるワンピースを選んだ。
上野街道を飛ばした。待合室に入ってる時
間だろうか。入らんで待っててくれ。
案内カウンターへ直行し、係を急かした。
「ボリビアからお越しの砂川サヨさま、ロビ
ーでミツ子さまがお待ちです」
二度のアナウンスに焦れながら二階への階
段を見据えていると、サヨです、と背後から
襲われた。驚いて振り向くと正にサヨだ。
サヨが忘れ物でもしてたのかなという顔な
ので、ミツ子はイヤイヤと首を振りビニール
袋を渡した。サヨはミツ子の指先を見た。マ
ニキュアをして良かった。ワンピースもだ。
――ンナグザ海の海水を含ませました。カザ
(香り)が含まれていると良いのですが。ケ

ン兄に身体を拭かせて下さい。

サヨの顔が晴れた。

「そこまで気を遣って下さって、ありがとう
ございます」

サヨは受け取ると包みをポンと叩いた。

「湯船にたっぷり水を溜めて手拭いを泳がせ
ます。ンナグザ海のカザが広がりますよ。ケ
ンは潜るはずですよ。魚を探すかも知れませ
んですよ」

サヨが笑ったのでミツ子は安堵した。

サヨが一礼して離れようとした。ミツ子は
少し距離を空けてから言った。

――サヨさん、ウチ、嘘ついてました。ごめ
んなさい。ほんとには、許^{いい}婚^な者は、ウチだった
んです。ほんとに、ごめんなさい。

サヨは目を見張った。しばらくミツ子を見
つめてから突進した。ウォーッ、ミツ子の身
体を抱いた。ロビーに泣き声が響き渡った。

ロビー中の視線を浴びていることを感じな
がらも、サヨは太い腕で締めて来る。やがて

その腕がケン兄の腕に思え、その腕の中でミ
ツ子は恍惚となり、ミツ子も声に出して泣い
た。一日のうちにたった五時間ほどの初対面
だった女との別れが、身内の今生の別離にも
似た激情に変転されるとは考えもしなかった。
目もとを整えたサヨはエスカレーターに乗
った。やがて二階に辿り着く高さの所で両の
手を振り上げ、クイチャーの歌いで“ニノヨ
イサッサイ”と叫んだ。美しい響きに聞こえ
た。ミツ子は心から遠い二人の倅せを祈った。
帰りの家路の車中で、十五夜舞^{ジュウヤカニ}台でのケン
兄の持ち歌を、三番まで思いっきり歌った。

晴れた空　そよぐ風
港出船の　ドラの音^ね愉^{たの}し
別れテープを　笑顔で切れば
希望^{のぞみ}は　てない　遥^{はる}かな潮路
あゝ　憧れのハワイ航路